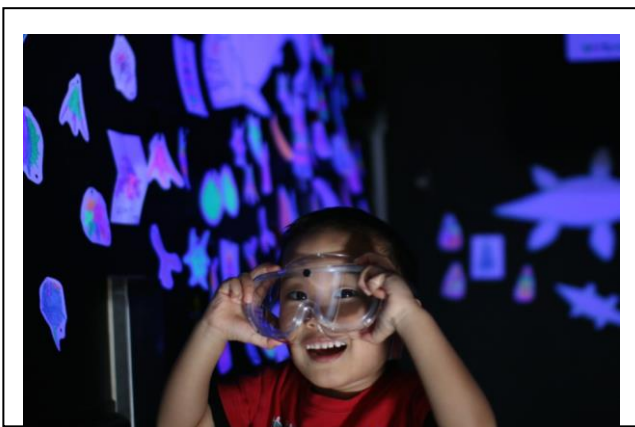


こども☆ひかりプロジェクト

全国のミュージアムと若者たちで育む、オーシャンキッズ！

実施期間：平成27年8月25日（火）～平成28年2月26日（金）



【事業の内容・目的】

- さまざまな館種・地域のミュージアムが連携し、東北地方の4カ所を会場に「海」への興味喚起や親しみにつながる多様な切り口のワークショップを行うキャラバン事業を開催しました。
- 未来を担う子どもたちの「感じる心」を解き放ち、海への親しみをインプットすると共に、ワークショップを楽しんだ子どもたちを「オーシャンキッズ」と認定し、長期的に持続する「海に関する楽しい思い出」をクリエイトしました。
- 近未来を担う若者たち（大学生）を「オーシャンユース」として育成すると共に、参加者の子どもたちに近い目線のスタッフとして主体的にワークショップを行うことにより、参加者だけでなく若者たちも海に親しみ、海に関する知識を深める場としました。

活動の様子

■ 1. 「オーシャンユース」 実地研修 in アクアマリンふくしま

【開催日時】平成27年8月25日（火）15:00～21:00（研修）

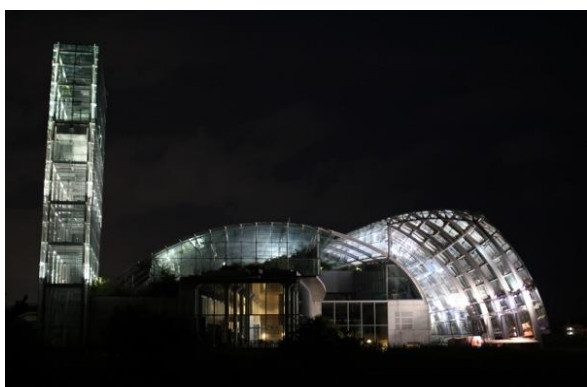
8月26日（水）10:00～15:00（ワークショップ）

【開催場所】アクアマリンふくしま

【参加者数】ワークショップ体験者数：670人

【活動内容・目的】

- プロジェクトのスタートアップにあたり、今後の活動の核となる「オーシャンユース」の研修を行い、スタッフとしての自覚と連帯感の醸成、海の学びの視点での活動を意識することを目的としました。
- 様々なジャンルのミュージアムが「海」という一つのテーマをもって、博物館ならではの様々なワークショップを行い、子ども達の「思い出」作りをサポートしました。



会場となったアクアマリンふくしま外観
1日目の研修終了後の夜景です

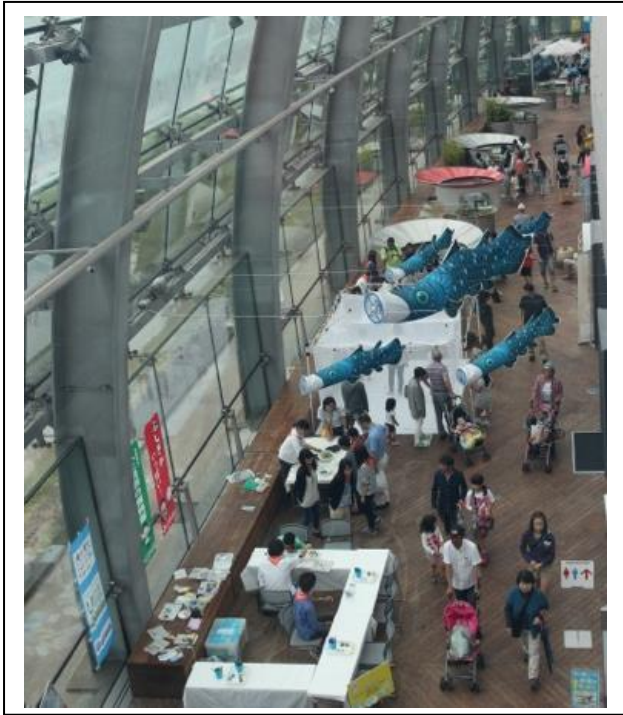


アクアマリンふくしま「命の教育グループ」
リーダー古川 健氏による講義



1日目は、これから「オーシャンユース」として活躍するにあたって、ミュージアムの基礎的なしくみや海に関する展示について、24名の大学生が学びました。
次に、現役学芸員らも加えたグループミーティングの時間を多くとり、アイスブレイクを行うとともに、「海」をテーマとしたワークショップについてのアイデアを出し合い、翌日の活動に向けての準備を行いました。





2日目は、「こども☆ひかりミニフェスティバル」として、全国4館の博物館ならではの5つのワークショップを開催し、海に通じる体験に楽しみながら参加していただきました。



自分で作る「さかなのずかん」のコーナーでは、自分が興味を持った魚のイラストや名前を書き込んだり色を塗ったりしながら、自分だけの「さかなのずかん」を作りました。また、「みずたまとあそぼ！」では、スポイトを使って色水の落とし絵や、水玉実験を行い、水に色が付いたり、しみこんだり、はじいたりする性質を体感的に学びました。

【参加者の声】

- 「海の生きものに触れられる様な企画があると楽しいと思います！」・・・体験型の企画を求める声がありました。
- 「魚をみながら、絵をかいたり色ぬりなどもあったら楽しそう！」・・・アートとのコラボを求める声です。海の生き物を題材としたさまざまなタイプのワークショップの可能性を感じました。
- 「子どもたちが楽しみながら学べるイベントをどんどんやってほしい」・・・来場者の多くは家族連れであり、子どもたちが主役であることを認識しました。

2. こども☆ひかり・キャラバン in 岩手

【開催日時】平成27年9月27日（日）11:00～15:00

【開催場所】岩手県立児童館いわて子どもの森

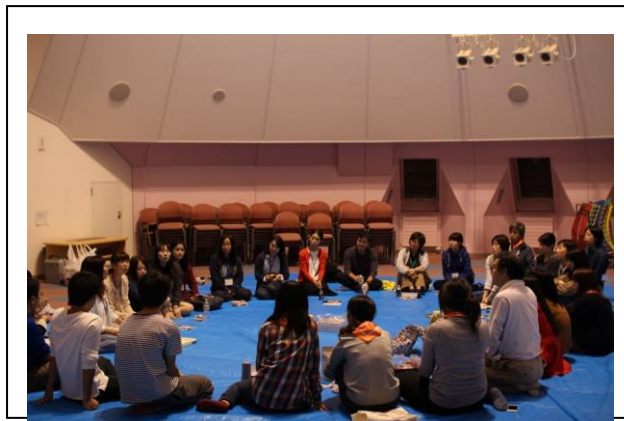
【参加者数】たいけん者数：438人

【活動内容・目的】

- オーシャンユースの本格的なデビューとして、日頃から多彩なワークショップを実施している館を選び、「こども☆ひかりミニフェスティバル」として、6つのワークショップを繰り広げました。
- 「ドレスコード」として「海を感じる何かを身につけて」と呼びかけ、雰囲気作りを工夫しました。子どもたちにオリジナルボディステッカーを付与し、海の学びの入口を楽しく演出しました。



開催場所の全景の様子



スタッフの打合せの様子



「小さな化石をさがそう！ レプリカをつくろう」の場面です。会場へ向かう道中、講師が北上川の河原の石を調達し、チャートの中に含まれる小さな放散虫化石を探しました。子どもたちは、「これはちがう」と、何度もダメ出しをされながら、いっしょうけんめいルーペを覗いて化石を探しました。放散虫は海の生き物です。大昔、ここが海だったこと、北上川は海に続いていることなど、研究員の話に耳を傾ける姿も印象的でした。右の女の子は、今回初導入のボディステッカー（タトゥーシール）をつけています。海の生き物をデザインしたステッカーは、子どもたちに大人気でした。



巨大なキャンバスに手足を使って絵を描く「大きな絵を描こう」です。青を基調とした数色の絵具で自由自在に描かれた絵は、大海原のような傑作となり、参加者はもちろん、学芸員からも、感嘆の声が上がりました。自由な表現こそがアートの原点であること、アートのモチーフとしての「海」はとても魅力的であることを、再認識させられたワークショップでした。参加した子どもたちは、このときの体験を一生忘れないだろうと思います。



「豪華客船のペーパークラフトをつくろう！」です。あらかじめ設定された完成像に向けて取り組む、「大きな絵」とは対照的なワークショップです。ペーパークラフトを完成させるには、技術と根気が必要です。小さな子どもたち単独では難しいワークショップでしたが、親子で語り合いながら、また、ユーススタッフや学芸員と語り合いながら、ゆったりと楽しむ姿が見られました。

【参加者の声】

- 「北上川の石、いろいろな形があることがおもしろかった」・・・体験が記憶にとどまることで、将来的に「海の学び」につながるきっかけを提供できたと思いました。
- 「大きな絵、子どもは参加できませんでしたが、楽しそうでした」「ボディステッカー楽しかった」(複数)・・・スケールの大きなイベントと、小さなアイテムで、会場全体にワクワクした学びの空気が醸成されたと思います。
- 「おねえさんたちも やさしくおしえてくれたので よかった」・・・ユーススタッフのホスピタリティが好印象を与えました。

3. こども☆ひかり・キャラバン in 南相馬

【開催日時】平成27年10月12日（月祝）10:00～14:00

【開催場所】南相馬市博物館

【参加者数】たいけん者数：1,528人

【活動内容・目的】

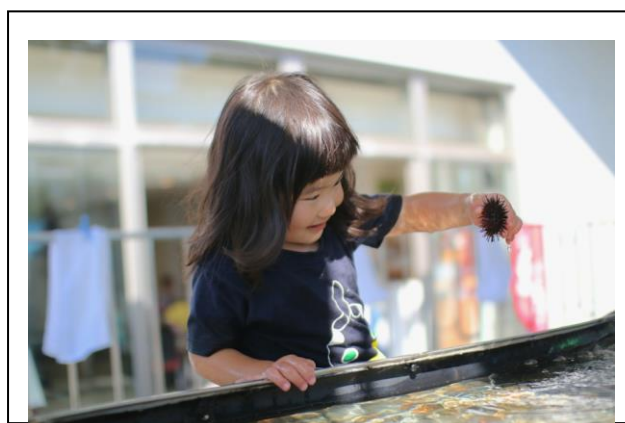
- 「こども☆ひかりミニフェスティバル」として、7つのワークショップを繰り広げ、大震災後、人数が減っている地元の子供たちに、ミュージアム本来の楽しさから再び海に触れる機会を提供しました。
- 歴史系中心の博物館に、「海」を切り口として自然科学や芸術等の異なる分野のコンテンツを持ち込むことで、ふだん博物館にあまり足を運ばない層が多数訪れ、開催館のサービス拡大にも貢献しました。



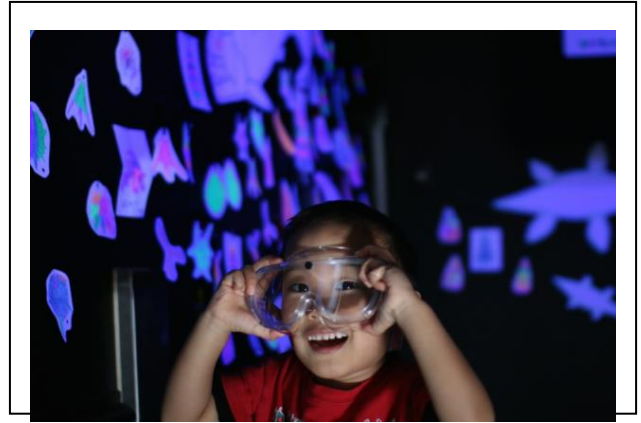
開催場所の全景の様子



続々と訪れる参加者



移動水族館「さわって感じる海の生き物」です。魚、ウニ、ナマコなど、さまざまな海の生き物に手で触れることができるコーナーは、終日、大にぎわい。生き物に触れる体験は、やはり海を純粹に感じやすく、圧倒的な人気でした。



「キラキラ☆りゅうぐうじょう」です。「inいわて」で試行的に導入し、今回、本格的に実施しました。移動博物館車（2t車）の内部をブラックライトによる暗室とし、蛍光ペンで描いた魚や放散虫をどんどん増やし、みんなで「りゅうぐうじょう」気分になろうというプログラムです。子どもたちは、ゴーグルを付けて、海の底にもぐった気分になります。ユーススタッフの乙姫さま(?)もいて、お気に入りの子どもたちが、何度も何度も出入りする姿が見られました。



「みがこう！木のかけら」です。さまざまな木のかけらを、サンドペーパーで、磨いていきます。そのプロセスで、木の感触、香りを感じます。海岸には流木が流れ着いています。波に洗われた流木は、不思議な形に加工され、ピカピカに磨かれています。子どもたちは、建った今自分が磨いた木のかけらと、海がつくった流木作品を比べてみて、海には不思議な力があることを感じたのではないのでしょうか。

【参加者の声】

- 「海の生きものにさわれた」、「いどう水族館が楽しかった」（複数）・・・生き物に直接接触れる体験は圧倒的なインパクトでした。
- 「きらきらりゅうぐうじょう、楽しかった」・・・不思議な空間が人気でした。「りゅうぐうじょう」というキーワードも印象に残ったようでした。
- 「深海の水圧実験」・・・子どもたちにはメカニズムの理解が難しい内容と思われましたが、保護者からは支持の声が複数ありました。

4. こども☆ひかり・キャラバン in 仙台

【開催日時】平成27年12月19日(土) 10:00 ~ 15:00

【開催場所】仙台市八木山動物公園 ビジターセンター

【参加者数】たいけん者数：905人

【活動内容・目的】

- 「動物園で海を感じよう」をテーマに開催しました。動物園にも、海の生き物がいろいろいること、いろんな生き物が海に関係していることを感じてもらいました。
- これまでの活動の集大成として、会場との打合せから、当日のプログラムの企画運営まで、オーシャンユースが主体となって、実施しました。



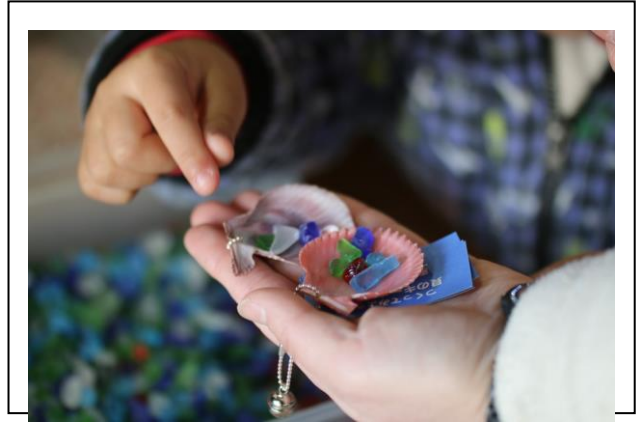
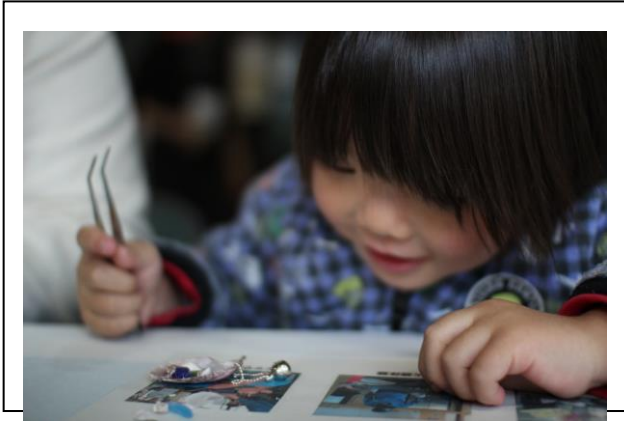
開催場所の全景の様子



ガイドツアーの様子



「はてな☆BOX動物園スペシャル」のようすです。箱の中にある秘密の材料を使って、思い思いに「動物」や「海の生き物」をつくります。材料は抽象的なものばかり。できあがった作品も、ふしぎなものがたくさん。子どもたちの想像力には、海も山も超越してしまうことを、納得させられたワークショップでした。



「つくってみよう！貝のキーホルダー」です。色とりどりのヒオウギガイに、きれいな石（海岸に落ちている淘汰されたガラスのような）や、貝殻をのせ、自分だけのステキなストラップをつくります。ピンセットを使った細かい作業でもありますが、いっしょけんめいつくった作品に、満足したようすでした。いつの日かまた、海岸に行ってみたくなったのではないのでしょうか。



「ひつつきむして髪かざり～うみバージョン～」のようすです。渡り鳥もそうですが、小さなチョウの仲間にも、はるばる海を渡ってやって来るものがあります。ユースたちと、どこから、どうやって飛んで来るんだろうね？と、対話をしながら、かわいい髪かざりをつくりました。実物の標本を間近に見たことのない子どもたちは、チョウの色や模様の美しさにも、驚いたようすでした。

【参加者の声】

- 「震災以来、海は怖くなっていたが、また行ってみたくなった」・・・海に親しんでほしいというメッセージは、伝わったものと思います。
- 「海にあるものがきれいなキーホルダーとなりました」・・・拾って、集めて、という本能的ともいえる小さな行為が、思い出の原点です。
- 「学芸員さんが、海についていろいろ教えてくれたので、学べた」・・・学芸員、ユーススタッフ、人と人とのコミュニケーションが「学び」にとっていちばん重要だとあらためて感じました。

5. オーシャンユース成果報告会

【開催日時】平成28年2月26日（金）17:00～19:00

【開催場所】ヒューモスファイブ 会議室

【参加者数】15人（ユース11名）

【活動内容・目的】

- やりっ放しではなく、目的を達成できたのかどうか、成果と課題をしっかりと検証し、新たなアイデアを創出する重要な機会として、開催しました。
- 1年間の実践経験をもとに、来期の計画について、新たな夢とアイデアが生まれました。



今年度の活動を順に振り返り、印象に残ったこと、うまくいったこと・いかなかったこと、海の学びについて感じたことを述べ合いました。

ユースにとっては、学芸員と直接触れ合い、いっしょにワークショップをするという経験は、とても新鮮で、印象深いものようでした。博物館や美術館に学芸員がいることは知っていても、多くの人は接する機会がない。裏を返すと、学芸員らも、外部の人といっしょにプログラムを実施する機会がほとんどない。あらためて、このことを認識しました。

スタッフ体験がはじめてのユースにとっては、来場者の動きや表情などのすべてが、新鮮で貴重な経験となっていました。楽しそうに見えるブースには人が集まること、自分の表情一つで子どもたちに伝わるメッセージが大きく変わることを、鋭敏に感じ取ったスタッフもいました。このようなことは、書物や講義で決して教えられるものではなく、彼女ら自身の「学び」として、以後の活動に活かされるものと思われました。

経験を経たユースからは、ミュージアムが提供するプログラムへの、忌憚のない指摘もありました。専門家は、自分の保有する知識を「わかりやすく」伝えようと努力していますが、いくらルビを振っても専門用語の意味は理解できないように、提供するコンテンツと対象者のニーズ（発達段階）とに、ミスマッチを感じたというものでした。

これは、しばしば見られる学芸員らの陥溺であり、ミュージアム側のスタッフもはっとさせられました。ユースといっしょにワークショップを実施することで、学芸員自身も「学び」の機会を得ているものと思われまます。

今後の計画について意見交換する中で、たとえば「はじまり」や「つながり」をテーマに、いくつかのプログラムをパッケージ化してはどうか、というアイデアがあり、具体的な会場やプログラムについても、アイデアが出されました。

この事業「全国のミュージアムと若者たちで育む、オーシャンキッズ！」では、「海」に関する何かを教えるのではなく、学ぶきっかけを提供することを主眼としましたが、今年は手探りの状態で、それぞれの会場でのプログラムには、連続性を意識していませんでした。このことで、提供者側の意識も、やや散漫になっていたのかもしれない。「自分たちで新しいプログラムを開発してみたい」というユースの意欲も取り入れ、来年度以降の事業実施につなげられればと思います。

【参加者の声】

- 「学芸員の方々と話せた、触れ合えた、交流できた」（複数）
- 「ユースの不安が子供に伝染し子供も不安になる（ユースが触れないと子供も触れない）。まず自分が親しむこと」・・・ユースの役割の重要性を感じた）
- 「（来年度は）海のはじまりは、生物のはじまりなので、「はじまり」を知ろう～みたいなのがいいのでは？」
- 「今後はユース独自で新しいことをしてみたい」・・・プログラムを開発してみたい）

【事業全体のまとめ】

○新たなプログラムを開発するきっかけとなりました。

「キラキラ☆りゅうぐうじょう」「さかなずかん（和綴じ製本）」は、今回、新たに開発されたワークショップでした。「大きな絵」「みがこう！木のかけら」「はてな☆BOX」「ひつつきむしで髪かざり」は、これまでも実施されたプログラムでしたが、今回「海バージョン」にアレンジされました。

○子どもたちの興味関心の原点を垣間みることができました。

必ずしも、水族館の来館者＝魚好き、動物園の来園者＝動物好き、というわけではありません。何かを体験してみたい、という欲求が、学びの原点であることを再認識しました。

○ユーススタッフの成長が見られました。

学芸員と濃密なコミュニケーションをとり、さまざまな会場でたくさんの来場者に対応することで、スタッフとしての自覚が高まりました。

主な連携・協力先について

連携・協力先名	連携・協力の内容
1. アクアマリンふくしま	会場提供・来館者への広報・プログラムについてのアドバイス
2. 岩手県立児童館いわて子どもの森	会場提供・広報
3. 南相馬市博物館	会場提供・広報
4. 仙台市八木山動物公園	会場提供・広報
5. 九州国立博物館・仙台市縄文の森広場・仙台市八木山動物公園・アクアマリンふくしま・日本科学未来館・京都国立博物館・キッズプラザ大阪・兵庫県立人と自然の博物館・NPO法人こどもとむしの会・加古川市少年自然の家・福岡市美術館・石橋美術館・O9works（青森）・長崎県文化振興課	ワークショップ実施
6. 仙台市太白山自然観察の森・AtelierS2（仙台）・神戸アートビレッジセンター	ワークショップ・運営 協力
7. 岩手県二戸市・仙台市・仙台市教育委員会・SMMA（仙台・宮城ミュージアムアライアンス）・南相馬市	広報協力

主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 福島民報	被災地に楽しい「学び」を アクアマリンで実地研修 企画担う学生育成 きょうミニフェス、2015年8月26日
2. 河北新報	物作りに夢中で挑戦 仙台・八木山で体験会、2015年12月25日
3. ミュージアムキッズ！	ワークショップどきどきたいけん こども☆ひかりプロジェクトミニフェスティバルをとことん楽しむ！、2015年12月1日

以上